

自序

自井氏藏書

雜

引馬文庫

小人困居し多厄苦をなすの治宜方は哉女子乃てま
 あらんゆ禍ひをま移くの門窮困の表示方るべし
 寢及麻苧う措苧と暮幣白幣と唱へ毛と糸糸祇
 をまらるや久しされ紙漉業此紗しうらるゆ
 のまらるは是をむく耕作の餘力を考へ女子もよを
 これを製し國益とて紙の亦多し寢及の亦紙
 漉立のうはを記し生業のたより需んよち枝お
 ともならん業を採ふ且紙と交易と作の職都會
 きそふと人とも其本末を弁へど其勞若んあざん
 を獲り及費失とるゆ塵埃及等しきをいつてま
 け業の祖祚の冥愈を抄それうらんや平これと家
 業及敬遠せん其始終を画し画し一書と
 なと友人何げをを採りらるをせんゆをらふ平
 紙の同九ありて文字又拙く後突の必執なること
 志れされどもけ書文を務め巧よとられ志にあり
 されば友人のりらるに懇し其始を記しけ序
 とぬとゆあうり

紙漉重宝記譜言

三竺ていちへ經文を本の葉にかく梵語は貝多羅葉と唱ふ
唐土も昔一い本の系削竹其書せしむを佛本初も大化白
維の以經卷の裏を用也といふ其後紙を制衣と付といふも今乃
布田古も本れおとく一統るが慶雲和初の以掃本人麻呂石見の
國の守護よりしとれた民をてけ製を教へ漉しむるよりけ紙を
これ地み佛よりえしとれた周防の山口大内氏代々相傳しと
和漢通活の名家よりよめく本初め紙と云なるを去り毎
唐土より毛を乞ふ大内氏とれを許諾し石長防の三及み神へ
毛と漉しと彼地へ渡るといふたに候ひ星を賞せしむ書に佛にて
詳なり唐土の製は今の唐紙の類のとなりけ紙書画の類乃
外別也と稀なり実と下品と謂つた一御國のむとれた紙の
ほどはと異國よりしとれを扱ふ賈人毛等のむをさとり必
抄るそくにと紙のを傷むとけ紙石及麻呂郡英法郡の
間と送路せしむ疑ひたり隣郡安田御領と羽豫列大
洲等各有彼地より佛本込とて一一位掃本人磨明神毛を
製する御祖神とれと仰きと敬とて世人其神意
を知りて紙を歎きかくいふの

真楮草之圖



其を極付るにちき根と分け尺を二寸七分切根り二寸三分中へ埋
 置て西園つて九月はこれを極置かり工方ふくは月は極るを土地
 の暖よううて遠より極付一季一尺のびる二季目は二三尺
 とか三季目には尺に及すと如く年月六尺出素ちらふに九尺ものびる
 かり餘いこれより考知れ勿論切陸二株は季ごとく又本種は生
 葉も又身を懸て枝々繋ぎてとまはくかるとあるが
 又年月より新左紙添は用也古と細は極るよ出素よりしうらだ新田の
 岸のこに極るよはを極置を焼ふとくきびを焼ふとくしき耐は極
 るも悪し他の他抽は糞と其餘はの自然は洞を好む山さ

右同捲つとに生育とよぶも新田よつとるはむねむき入るに葉も
目かけをいふ之雨さる事らのびさく夏秋の風のたりに傷む之其上猪麻の
ふたに食まぬ申う新葉止むて好喰ふり之をトサ芽ぐせも例年
十月より切捨つたりけ捲かむ是年又新穀増本出まると多き
はしよ懸葉後長一回或二回出まると宜き年二回ものびると
あはじよりく團蓋の二つとみかりり
右葉捲つと一洗つたりけ ともいふ紙漉まよてよは種少く老種は月一々目
よ付代根三々式トぐらひ
又月ト種少くわら芽あり紙漉まよてよは種少く老種は月一々目

紙漉まよ付代根をよト位○又芽とつるの紙の性初に
ふれもい本よて長く且種をよ根かひ及を挽切し本と捲葉芽と
わら芽の心をいもま捲芽はぐらひと種出ま田地水辺をりまいと
よて農家の心旁らして出まると其之紙も少くは苗耐専と作るけ
る芽漸寛政の種も種まは紙漉ま少くは老種は月一々目よて
代根式ぬヌトヌハリン○右者諸本よはくま芽ぐと又懸葉秋葉
はしよ十月よて新葉はよに種まは猪麻の患さうらんはふだんの
猪麻をおえ捲芽のわらへ埋も苗耐とま芽ぐと又懸葉はよと
小園人の物溜りせし芽あり其を紙漉まをわらひ

その播苧苧たるの圖

十月のりるん
 本ををんせ
 苧どて人
 もあり



押し入用があらう
 500のたき
 2000のたき

大なる
 同すに
 切ら
 へれ

播苧賣買之り

播苧を本を
 賣買
 十女
 三十



紙布の又
 あれの中
 だ

を
 宗
 や
 かい
 かい

楮草むしり此圖

農人楮おごふ者

楮かりはむしき

二又三又わがに切

と蒸をまがくして小口の

ういしむけくねとんく

藝せしを糸糸の夜

み端六あへわがの蒸

と蒸をまがく

楮草法二又六七す

本の根を楮

たあよき
そむた
りらぬ
ひりて
くませ



月ういを剥く圖

楮のおとく

むしり

皮をむき

とふたり

甲の蒸本

ぬきの外

剥き

えんまよ
むくさ
をうがえ
りんくむけ
やあし
きんぬ
ひがてん
ごしごかむ
にむす

たあよき

むしり
やらへ



猪草うは干之園

皮をしらぬに干す
女の汗もいそぎに
二三月の間よりと
風あしが一日



うは干す
うは干す
うは干す

うは干すをあげ
うは干すをあげ
其後又貴目が掛
改め抱みとふ

月賣買札事

又月把を結るとの附
三十度月之抄より又
月うそ右の干皮銀九
十三度廿五にて凶奉
廿八度後とるのみま
そめ之諸國へつと物
それい引け物と

は二三より
女の内皮
外うしらせり
こそらふ



うは干す
うは干す
うは干す
うは干す
うは干す

月皮を漬るく圖

いよ紙を漉ん
 とろふ時分を映
 映方うんが朝
 きであく漬母さ
 粘りうと皮を
 とびれんちうり

画圖のおく

いよ漬母
 梅の中と漆を
 うげえれおし
 一日一夜つけ掛れ
 てもよう



月うと皮を削圖

月皮をとり捨るちうり
 漆のおとく色丁しそせ
 漆引く漆皮悉く去
 漆の用也これを
 漆はと唱ふそと

川で漆皮ひき入
 若き其後ろし
 漆できとろと入
 漆之精をうろし
 漆の本心製を猪草れじ
 漆の葉もろれちちうり



あま漬
 馬のう
 臺
 竹

漆は斗りて漆し
 ちう紙を生
 漆とて

月餅くわーの圖

さるは高ひ
 本つひもも
 かけ目十二
 代根十二
 代根十二
 石にくも
 あまうり防
 若國産
 尾形大竹
 送一高

さるは高ひを
 こひも二日
 けみも月餅
 けみも月餅
 けみも月餅



猪草う者大さの圖

石のまく製せと
 中へかくれ
 挿二本に
 立於根
 向うその
 鈍ととゆ
 の後入
 者汁い
 つくと
 二か
 敷通と
 こうく

全ハ
 二尺六寸
 二尺七寸



とろろ草の種乳

大豆小豆を焙る
時候等

ろろ草
実を生じたるの中
桐麻又似たり風又似たり
花実用まじり根と用
丸に團あり木の葉綿木
おろ

山とろろ草の根
自然に生じたりあり
これを蒸紙を漉し
用白其紙つる赤くする
とろろ草



花をほうを刈ぬき
又月入梅のちりてし
くろく之根の大きき
八分位長く牛房の
おろし石系又出来る
は又短し

葵実銀をぬき
かけ目百廿目
葵子付のきぬき
かけ目又百目



ひげはをこそげとり擲く
其の製法ところく汁のおろし
あてはし入るややう
みぬとあえりしにかけん
あれべし
紙漉し紙又き非やど入と
ぬれどし
むすのうそし小桶入
蒸入用種アツ

掃苔擲く圖

明日紙を濡んと云ふは
 掃苔又その土をあらふ
 ようあり

物飯をうけ置き
 みる間さげばは

てゆくわつらま紙又
 土のりを入るもあり

たさくとは漆を

け青きくきく入る

おまびらきひか

と表之

擲臺板長サ五尺幅三尺余
 厚サ三寸五分 檜板と作之



擲棒之圖

長サ
 三尺先は四角元丸



紙漉之圖

冷水を火桶に
湯とたぎしお
かからせり。

板原さといけれきく男の職
す紙の女漉をうとんととふ
わくたきか、すか桶の中へ
入る一あふらぎとらうとせ
まのうらそにしまをけ
をたて扱へんませあいせ
コウ、くよま漉がうかたれが
どうとまのてうらん扱
竹をひてのたまを引よんれが
海苔のてじらうんまのて竹さくら
ざらわんてあふをよじとせ
どうくうらくませるわどう



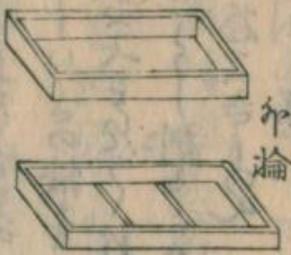
道具之圖

は美たぐり付の馬尾の紙紙は付之
毛を紙漉美かると囀へんらへん

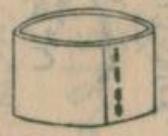
へ子論

卯論

美



水囊



まがき



竹 長サ一尺三寸

細サ糸の遊
のふと

内か論扱も制衣之
もろく女のカ、應どろ
あくとんか論へ美を
まら入子の論をんぬめ
用ゆのさう

竹の美竹と水引の紙
紙くけり馬の尾を
糸のぶくとじらゆの
根一右のるを、具
用まあべ

其二

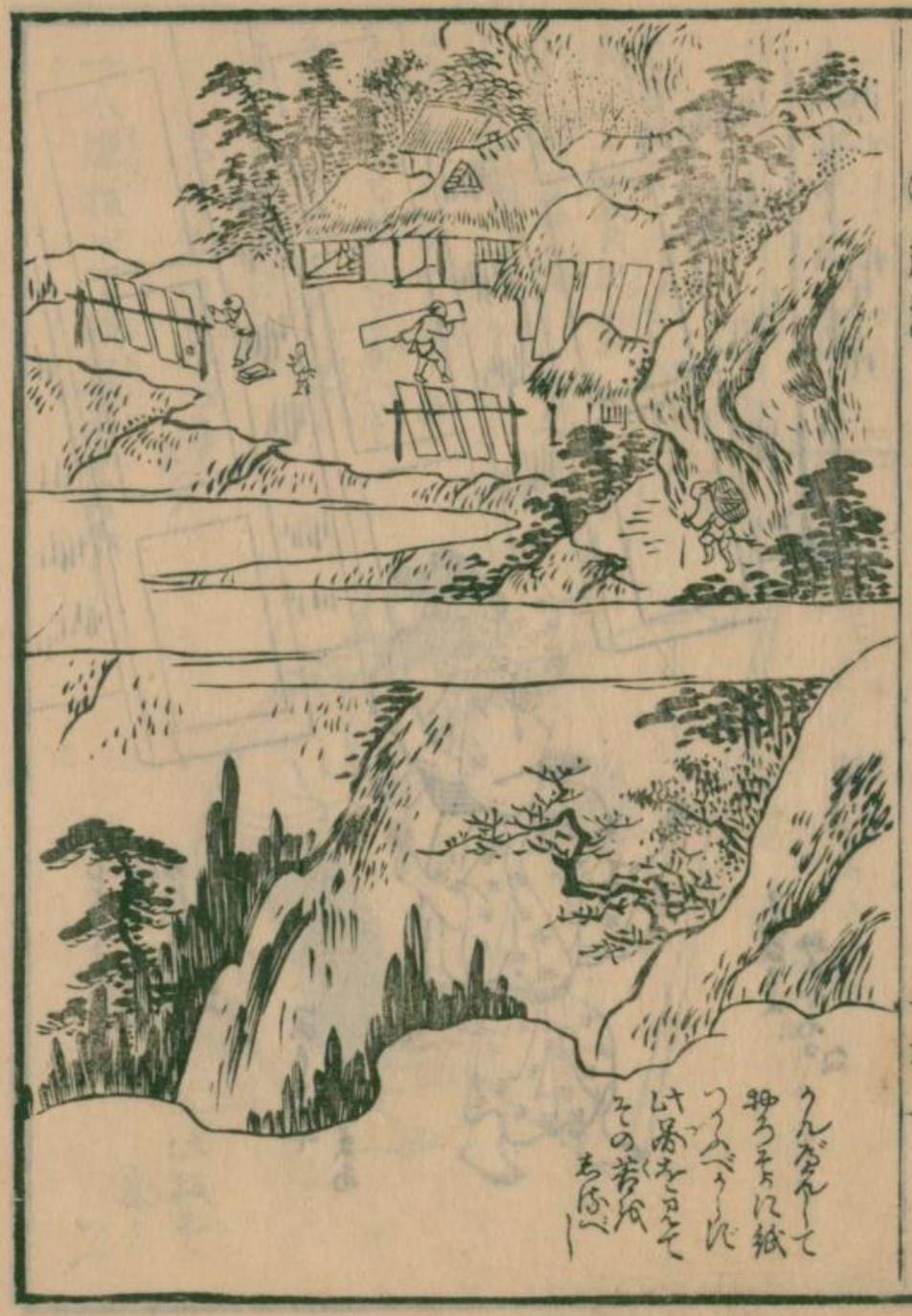
洗うる紙を
 けさりあとも
 丸のけこせよ
 りこせ帯紙にじよ
 今一つのくろくろく洗先の
 粘せよーけこの紙を
 うりよととたぐれ
 らせえのてりー測るよ
 洗ひ玉掃ふきりのえ
 紙ろさおさく洗ぐこ
 き付いこーの製衣
 のあらくとえー



箱回す
 一回さ
 せま

ちりつめたの
 けつめいさ
 こつあつらぬ
 のしや

一 定紙とろく計りて製衣とる紙生紙と唱書物に用ひ年久愛不持とる小
 虫へびと糸うて石炭紙の妙え書紙のう加へい清合とて
 一 控列名塩紙を右の上みんを加ふ諸國のうれへうさけい掃たり
 一 近年玄洲國にて紙漉沖紙の節書た之通 被捲りてとまふ糸と
 一 白又極上吉賀紙 代紙九拾五文 中物八拾五文 下物七拾五文 右不宗紙
 一 漉方子洋一揃草 代紙六文 三下 けまふやえ 糸のまき又百目は吉賀紙 一
 一 灰代紙一りの本 代紙右をまの紙漉一日に建たれり二人半板付
 一 中二入級紙 荒草 けりたふてい ちりつめたの 糸のまき又百目は吉賀紙 一
 一 白葛用へ不中いけ外た 代紙 ちりつめたの 糸のまき又百目は吉賀紙 一



かしの皮紙
を板風や
袋ふたに
をとりた
くも一紙
を紙竹と
よりたか
紙を

才紙裁切図

才紙一折二十枚づゝ
 葉を入十折細く二葉と
 右の紙を其葉本のせ角の
 寸法揃つて定規を以て
 右の葉とて踏付左のふに
 添を粘りてこれをよく切ん
 ぎを十々の一ノとく
 六ノ合せ一丸と成り
 街と納めいし葉紙は
 物にあり
 左の葉ををれて
 其の葉をよ〜に



才紙仕立図

さんよ
 紙をい
 うらも
 志れぬまじ
 うまで
 まま紙
 まれ

この紙は
 かまじや
 御足とら
 へちう
 ちゆう
 ちゆう





三里の石
おとろり
おどや
てあんまや

溪出ー乃圖

おとろり
あやりの
を月を一樹
てんま

俵はつりぬ圖



押しのほろのり
ふくろのり
くしを十枚
おひのり
まれば
うひが

大板
根をふがう
をこりけて
をこりけて
おひのり
おひのり

おひのり
おひのり
おひのり



文政七甲
甲年二月補刻

日本橋南壹丁目

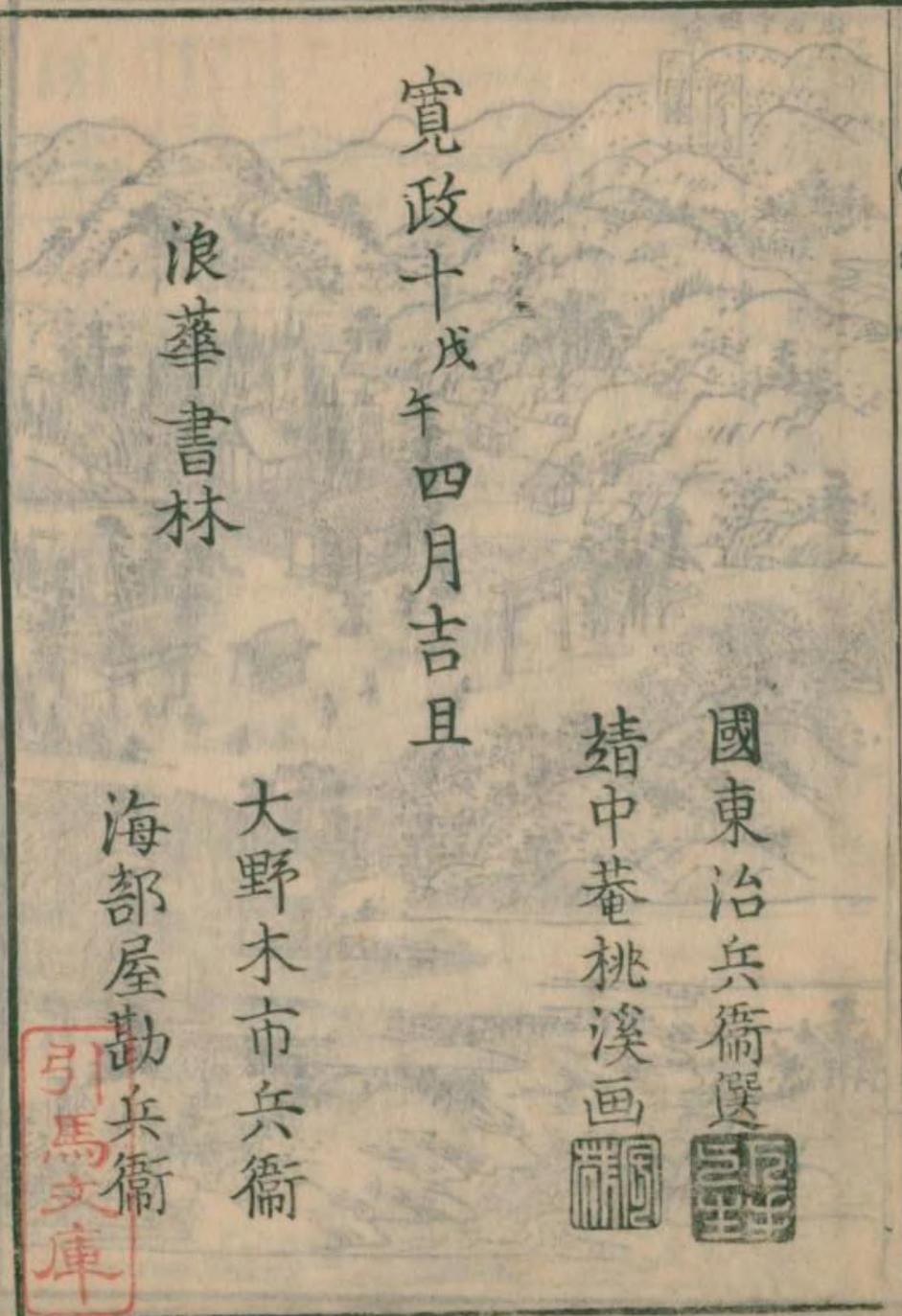
江都

須原屋茂兵衛

心齋橋通安堂寺町

大坂

秋田屋太右衛門



寬政十戊
午四月吉且

浪華書林

國東治兵衛選



靖中菴桃溪画



大野木市兵衛

海部屋勘兵衛

引馬文庫